

第4回 下顎の回避パターンと コンタクトガイダンス

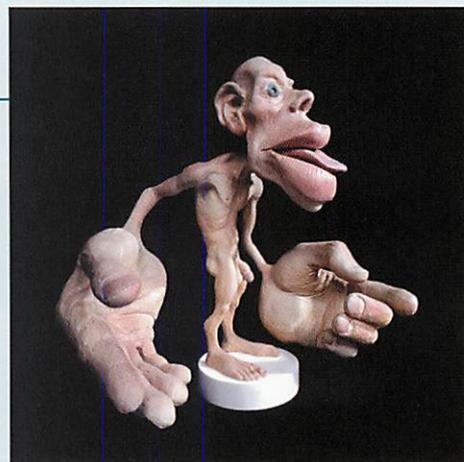
荒谷昌利

埼玉県開業 荒谷デンタルクリニック
連絡先：〒344-0061 埼玉県春日部市粕壁1-9-46

Part4. Avoidance Pattern and Contact Guidance

Masatoshi Araya

第6回
日本国際
歯科大会演者
10月9日(土)
Cホール
午後



連載予定	第1回	顎口腔システム	
	第2回	予備的咬合診査	
	第3回	Bioesthetic Dentistry の第一原則：Stable Condylar Position (SCP)	
	第4回	下顎の回避パターン(Avoidance Pattern) とコンタクトガイダンス(Contact Guidance：CTG)	←
	第5回	Bioesthetic Dentistry の第二原則：固有感覚性アンテリアガイダンス(Proprioceptive Anterior Guidance：PAG)の確立	
	第6回	Bioesthetic Dentistry の第三原則：遺伝的歯冠形態(Genetic Tooth Form)	
	第7回(特別企画)	Bioesthetic Dentistry におけるフルマウス・リコンストラクション	

はじめに——包括的咬合治療とは

自然は個体の咬合機能のために精巧なプランを提供してくれる。今までに述べてきたように、歯はシステムの中の一部に過ぎない。包括的咬合治療の基盤は、歯科医師が今起きている問題が歯だけではなく、顎口腔システムという1つのユニットのなかでいかに顎や筋の機能まで影響を受けているのかを認識することである。そして、このユニットに最高レベルの安定・健康・快適さを確立させるには、これらすべてのコンポーネントは調和のなかで連動していなければならないこともすでに述べた。

構成するどこかの部分がバランスを崩せば、当然全体のシステムはその影響を受ける。心臓病や糖尿病と同様に、起きている障害を明白に意識できるまでには長い年月を要することだろう。重要なのは、包括的咬合治療を施す時期が遅くなればなるほど、患者を最適な健康状態へ戻せる可能性が低くなることである。最小限度の保守的な治療で最適な健康状

態を確立させるための最大の鍵は、歯科医師が徴候レベルで起きている問題を看破し、可能な限り早期に介入できるかにかかっていると筆者は考えている。

1. 咬耗に関する考察

従来の歯科医学では、咬耗は避けることのできない“加齢現象”の1つであると認識されてきた。日常臨床において、1本の歯の咬耗すらない患者に遭遇することは稀有なことであろう。実際に多くの患者の歯は咬耗し、なかには、若年者も含めて象牙質に達するほどの咬耗を有している(図1)。とくに年配者では、髓腔内まで咬耗していることもある(図2)。

ところで、歯冠を構成するエナメル質は再生能力をまったくもたない組織である。生体にはこのほかに再生能力が非常に乏しい組織として、心筋組織と中枢神経組織を挙げることができる。その組織の再生能力が他の組織より一層乏しいということは、その組織は他の組織よりも生体にとって、より重要性